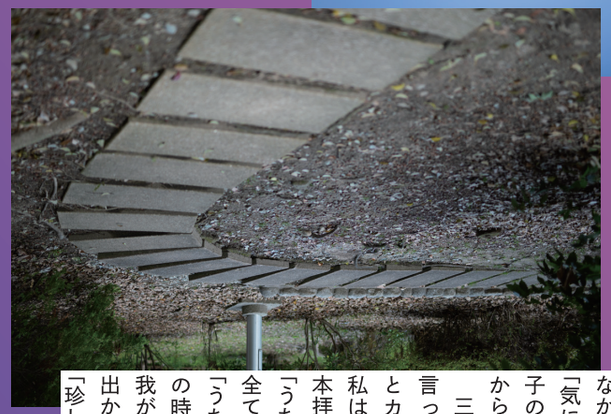
散歩する蜂

藤井颯太郎



玄関の鍵をかけたかどうか、心配になってきた。愛犬チャムズと散歩を始め、まだ十分もたっていない。一度気になってしまったものはしょうがない。しぶしぶ、家へ引き返す。息子も散歩が好きで、しょっちゅう二人と一匹、散歩に出かけた。息子が散歩に誘ってくる時はいつも機嫌の悪い時だった。父親と衝突するたび息子は、父親を誘って散歩に出かけた。中学に上がり反抗期が来ると、ほぼ毎日機嫌が悪かったので、ほぼ毎日散歩に付き合わされることになった。不思議な子だった。

突然、街のいたるところでサイレンが鳴り響いた。続いて緊急避難を促す音声が流れる。街頭のスピーカーに向かって吠え続けているチャムズを抱き抱えて、走り出す。ここら辺に公共施設は少なく、避難できそうな場所は全くない。チャムズを抱える手が汗ばみ、震える。深く呼吸しながら空を見上げてみる。気持ちいいほどの晴天。風が涼しげに吹いて雲を押している。ちょうど、飛行機が一機飛んでいるのが見えた。もしこのまま落ちてしまったら、あの飛行機に掴まろう。と、出来もしないことを決意した。

「犬連れ！こっちに来い！」

振り返るとすぐ隣の家の窓から肉付きの良い腕が見えた。チャムズを抱きしめながら人生で一番早く走った。あと三メートル。街路樹の枝葉が威嚇する猫のように逆立ち始める。あと一メートル。スニーカーの裏側が滑り始めた。自分の体重が幼稚園児ほどになってしまった。肉付きの良い腕に掴まれ家に引き込まれた瞬間、私たちは勢いよく落下しはじめ、すぐに天井に叩きつけられた。私とチャムズは運よく男の身体に落下したが、男は運悪く、私とチャムズの下敷きになった。「間に合ってよかったな」肉付きの良い腕で引き起こしてくれたのは、特に腹周りの肉付きが良い男だった。

雨の日の窓際で外を眺めるように、チャムズは逆さまになった街を眺めていた。「こんなに大規模な落下があるなんてニュースではやってなかった。なんのための予報なんだ」地面に固定されている冷蔵庫に何度もジャンプを繰り返し、やっとの思いでビールを取り出しながら男は言った。「本当に助かったよ。ありがとう」「いいよいいよ、お互い様だから。助けたおかげで犬も撫でられる。犬アレルギーだけどね」男がプルタブを引くと、ビールの缶は気持ちの良い音を立てて吹き出した。慌てる男をよそにビールの泡はのんびりと、空の方へ落ちていった。彼は空に流れる雲を指さして言った。「あっちは俺が昨日こぼしたビールの泡だ」

私とチャムズはひっくり返った家の片付けを手伝い始めた。この星が〝散歩〟を始めてもう三年ほどになる。それ以前は太陽系なるものがあって、この星は規則正しく巨大な星の周りをくるくると回っていた。この星の上で生きているどんな生き物よりも長い歳月、地下鉄のダイヤより正確な時間で毎日回り続けていた。だがある日、従来の軌道から逸れはじめ、ほとんど予測できないほど不規則に動くようになってしまった。いつ他の星とぶつかるかわからないし、いつ重力が変化して、天地がひっくり返ってしまうのかわからないのだ。三年前、この星が初めて散歩した日。この星に住む多くの人が空へと落ちていった。

だいぶ片付けが済んだ頃、チャムズが一足のスニーカーを咥えてきた。引き離そうにもなかなか引き離してくれない。

「気に入ってもらえて嬉しいよ。それはうちの息子の足の匂いだよ。片方しか戻ってこなかったから大事にしてくれよ」

三本目のビールを開けようとしている男が言った。スニーカーの中をみると〝ジョウタ〟とカタカナで書かれていた。男のその声色で、私は全てを悟った。彼の横に座り、ビールを一本拝借し、飲む。「いくつだったんですか」「十歳」「うちの子は十五でした」それだけの会話で彼も全てを理解してくれた。

「うちの子がね〝散歩はバランスを取り戻すための時間なんだ〟ってよく言ってました。だから我が家では親子喧嘩した日、必ず一緒に散歩に出かけるんです」

「珍しい子だなぁ」

「反抗期真っ盛りでしたから、毎日散歩に出かけましたよ。散歩しているうちに、徐々に気持ちが凪いでいって、少しずつ話すようになって、バランスを取り戻したら、二人で家に戻るんです」

「賢い子だな」

「でもね、子供って一人立ちしちゃうんですね。ある日急に〝一人で行けるから〟って言い出して、一人、散歩に出てったんです。置いていかれちゃいました。三年前のことです」

遊び飽きたのかチャムズが窓際からこちらへやってきて、よだれまみれのスニーカーを返してくれた。

「いつも思うよ。あの子たちはちょっとでかけただけなんじゃないかって」

チャムズは男が気に入ったのか、男の手をべろべろ舐めまわしよだれまみれにし始めた。途端、チャムズが宙に浮き始めた。男はチャムズを抱き抱え、私は男を抱き寄せた。緩やかに天地がひっくり返りはじめ、天井においていたビールは、地面に叩きつけられた我々の上に降り注いだ。

ビールまみれのまま私とチャムズが家に帰ると案の定、鍵はしまっていなかった。つまり、玄関のドアが全開になり、家中のものが表の道路に散乱していた。私とチャムズは今日二回目の片付けをしなければならなかった。息子の部屋のものもかなり道端に放り出されていた。今日が雨でなくて本当によかった。空を見上げると飛行機は随分遠くへ過ぎ去って、飛行機雲だけがわずかに、名残り惜しそうに残っていた。と、雲間から何かが落ちてきて、チャムズと私の前に転がった。チャムズは嬉しそうに飛びかかり、その見覚えのあるスニーカーをよだれだらけにした。私は今度こそしっかりと玄関の鍵をかけ、しっぽを忙しなく揺らすチャムズとともに、再びあの男の家まで短い散歩を楽しむことにした。

「声の展示」朗読 ——— 今井 秋菜　城野 佑弥
撮影（@豊中市内）——— 鈴木 竜一朗